

広島戦後直後に実施された建築設計コンペティションにおける設計案に関連しての原型・類似型に関する研究 その2. 広島平和記念公園丹下健三案とコベントリー復興計画案

コンペティション 広島平和記念公園コンペ 丹下健三案
コベントリー復興計画 軸線 戦争廃墟

正会員 石丸 紀興

はじめに

前稿¹⁾に引き続き、被爆後・戦後の広島において実施された建築設計コンペティションに応募した特定の設計案を取りあげ、その設計案のデザイン傾向・形態特質の上で、原型的あるいは類似的な関係と想定される計画・設計事例を見だし、その相互の関連や差異を考察するものである。なお本文においては敬称略として記述しているため、関係者にはご容赦願いたい。

1. 研究対象と研究方法

ここで取りあげる戦後広島のコンペティションは、前稿と同じ「広島平和記念公園及び記念館」建築競技設計である。そして原型、類似型の対象として取りあげるのはイギリスのコベントリー復興計画案である。

研究方法は前稿と同様で、コンペに関連した設計案についてその原型、類似型と思われる事例について資料を収集し、比較・考察することである。

2. 広島ピースセンターコンペの概要

1949年に実施された広島ピースセンターコンペにおいて、丹下健三グループが1等入選したことは周知のことであるが、そのデザインは独特の配置計画であり、都市計画的な配慮のもとに建築設計がなされ、極めて特徴的な形態を有する内容であった(図1, 2)。1等入選案の紹介において丹下グループは軸線という言葉は使用していないものの、「四つの基本的な施設—記念館—広場—祈りの場所—原爆の遺骸—が配置されている。」と説明している。審査員である岸田日出刀は「原子爆弾洗礼の基本的な残骸である元産業奨励館(中略)・・・100米道路に面する敷地境界線の中心とこの元産業奨励館とをつなぐと、それは100米道路と略直角をなす。この線を主軸として諸種の建造物や園内諸施設を配置計画したことに、1等案のまず大きな特徴と長所がみられる。」と明確に主軸の存在に触れている。

後に藤森照信は、その著「丹下

健三(新建築社)において「配置図と鳥瞰図から知られるように、100m道路を横軸(東西軸)とし、縦軸(南北軸)を原爆ドームに向けて引く。この十字軸は、動線に重なるだけでなく、視覚の軸ともなり、横軸の東の先には比治山が望まれ、西の端には丘陵が盛り上がる。」と記述している。

軸線の存在は、軸線の延長先に丹下によれば「原爆の遺骸」、岸田によれば「残骸である元産業奨励館」、その後広く呼称として定着する「原爆ドーム」を位置づけたことで極めて明確な特徴として認識されたのである。

3. コベントリー復興計画案

コベントリーはブリテン島ロンドンの北方に位置し、第2次世界大戦開始時の早い時期からドイツ空軍によって爆撃目標とされたが、特に1940年11月14日夜の集中的な爆撃によって市街地は壊滅的な被害を受けた。中でもコベントリーの象徴ともいえる聖ミカエル教会(通称大聖堂)は徹底して破壊されたが、尖塔と側壁の一部は奇跡的に倒壊しなかった。被災後、まだ戦時中であつたが、復興計画が策定された。復興計画については既にまとめて報告しているが²⁾、は紆余曲折の後、1941年「カド・ギブス案」として図3のように決定された。その復興計画案は、都市中心部に大々的なブリックトと呼ばれる歩行者専用路を採用したショッピングセンターを配置す

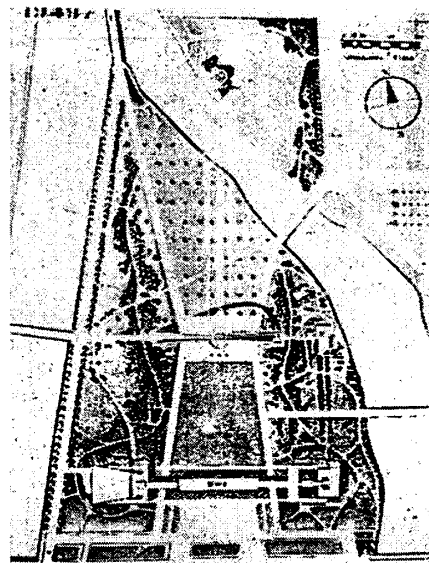


図1 丹下案配置図

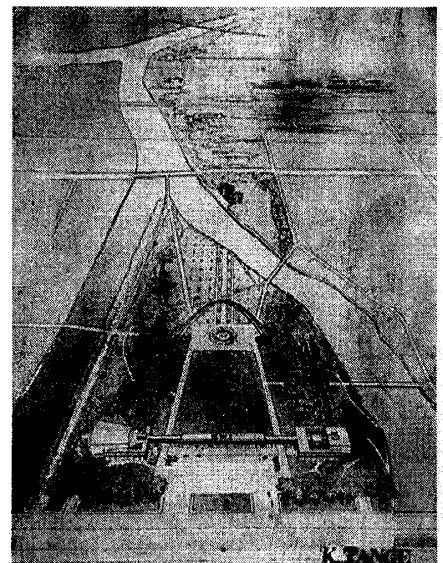


図2 丹下案鳥瞰図

A Study on Prototype and Similar-type referring to the Project towards Architectural Design Competitions which had been held soon after the War in Hiroshima—Part 2 Kenzo Tange's Project towards Peace Memorial Park Competition and ones towards Coventry Reconstruction Planning of City Center
Norioki ISHIMARU

るものであった。その歩行者専用路が十字形の形態で、特に長軸の延長先に廃墟となった大聖堂の尖塔を位置づけたのである(写真1、2、3)。

4. 両案の比較と発想の検討

確かに両案を並べて比較すると図4、図5のようになっている。すなわち、丹下案は百メートル道路に直交する記念公園の軸線を延長した先に原爆ドームを据え、コベントリー復興計画の最も核心的な部分である中心市街地において歩行者専用道路を十字形とし、そのアップリシットと呼ばれる軸線の先に大聖堂廃墟(Cathedral Ruinsと呼ばれている)を据えている。しかも、両案とも廃墟を保存するまでに相当な議論があり、最終的に保存に到達したのである。違いとしては片や祈りの場としての記念公園であり、片や商業的なセンターでの軸線であったということ、都市的なスケールはコベントリーの方で都市構造

そのものを規定していることである。

コベントリーのショッピングセンターの軸線の現場に銘板があり(写真4)、

”Coventry’s pedestrian precinct was designed to be aligned with the cathedral spire of St. Michael’s. The use of a spire as an architectural vista was later copied by both Hanover and Japan”

と記述されている。ここで、塔を建築的ピスタとして使用することが、後にハノーバーと日本に応用されたという見方をしており、日本とは広島であることは間違いのないであろう。

5. まとめにかえて

戦後、戦災復興院や建設院は復興情報を収集して印刷物として発行していた。従って丹下は、コベントリーで復興計画が進行していたことは知っていたであろうが、廃墟を見据えた軸線計画の存在、その内容を熟知してはいないであろう。たまたまイギリスと日本ではほぼ時を同じくして廃墟軸線が構想されたと捉えられるのである。

脚注

1) 拙著：広島戦後直後に実施された建築設計コンペティションにおける設計案に関連しての原型・類似型に関する研究その1 広島平和記念公園(ピースセンター)コンペティション丹下健三案とジェファーン

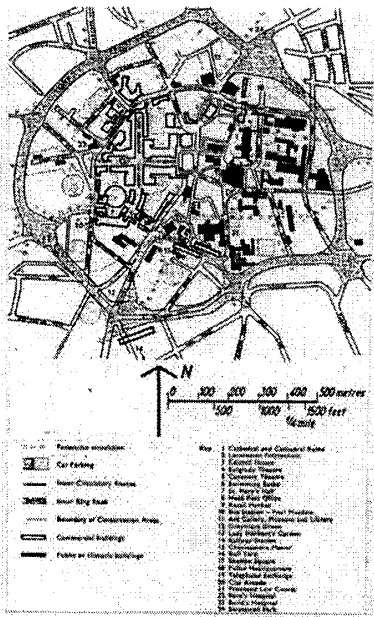


図3 コベントリー復興計画案

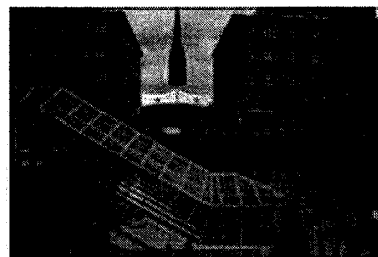


写真3 同じ軸線と廃墟(2002)

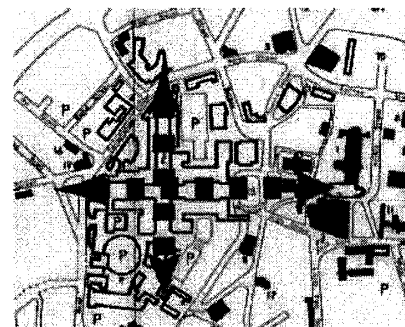


図4 コベントリーの軸線と廃墟

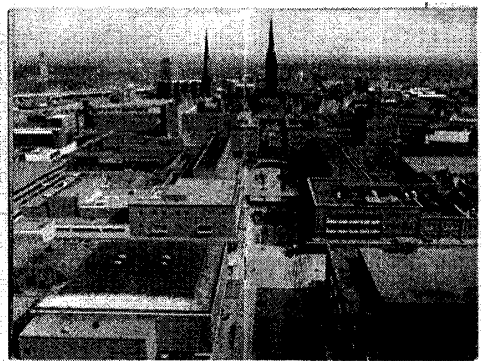


写真1 セントミカエル大聖堂の廃墟



写真2 商店街からの軸線と廃墟(1971)

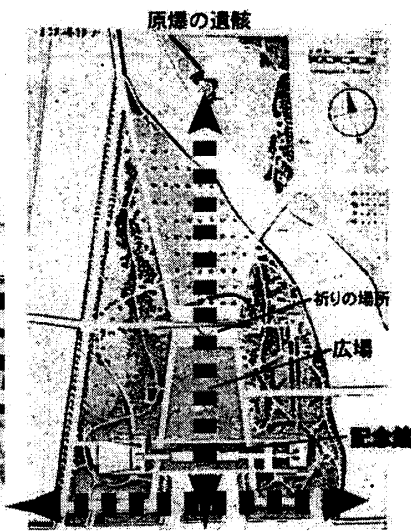


図3 平和記念公園の軸線と廃墟

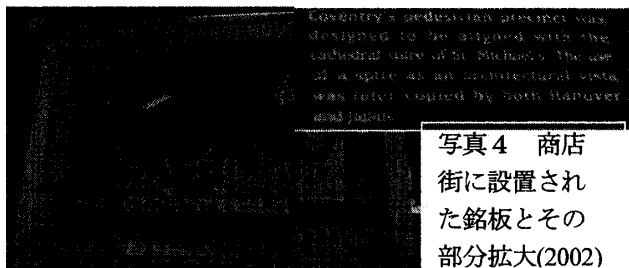


写真4 商店街に設置された銘板とその部分拡大(2002)

ン記念塔(日本建築学会中国支部研究報告集第31巻、平成20年3月)
2) 拙著：コベントリーの戦災と復興計画—世界の戦災都市とその戦災復興都市計画に関する研究その1(日本建築学会中国・九州支部研究報告第6号昭和59年3月)。